LIBRARY INFORMATION

ペトラルカ『詩集』ヴェネツィア（アルド版）1521年
PETRARCA, FRANCESCO-Ⅱ Petrarcha. Vinegia (Aldo) 1521　図書館長　池田　廉……2
スウェーデン語専攻新入生のためばかりでなく…外国語科目・スウェーデン語助教授　清水育男……5
「本を通じた新たな“出会い”を求めて」……外国語科目・英語講師　秋田　茂……7
1989年度ーよく読まれた本ー(貸出図書ベスト30)……8
ー図書館統計ー……9
“貴重図書解題” ORTELIUS, Abraham：Theatrum oder Schawplatz des Erdbodems (1572年刊)について　人文地理学助教授　神前進一……10

大阪外国語大学附属図書館　1990.4.27

第7号

ペトラルカ『詩集』ヴェネツィア（アルド版）1521年

PETRARCA, FRANCESCO.-Il Petrarcha. Vinegia (Aldo) 1521

図書館長　池田　　廉

フィレンツェの近郊サンタンドレアの山荘で、失意の身のマキアヴェリが、『君主論』を書いていたころの様子は、彼自身が友人宛の手紙の中で語っている。早朝に森に出掛けて、木こりの監督にあたり、鳥網を仕掛ける。そして、昼下りともなれば、居酒屋にたむろして、顔見知りの村人とチェスの賭事に興じる。だが、夕方となると、文字どおり威儀を正して書斎にこもり、ひとり静かに古典の書物をひもとき、創作の筆を走らせる。さしあたり現代ふうにいうならば、日常生活のリズムの取り方が巧みであったとでも形容するところであろうか－。ところで朝方出掛けるときに、きまって一冊の書物を携帯したという。「ダンテか、ペトラルカか、ときにはマイナーな古代ローマの詩人の本」を手にもって行った、と。ダンテが『神曲』を指すとすれば、ペトラルカはいうまでもなく、『詩集』を指す。この時期は、彼がメディチ政府の公職から追放されていた1513年のころで、携帯に便利なアルド版『ペトラルカ詩集』が出たのは、1501年のことである。書物の歴史の上でも有名な、この八ツ折りのアルド版が契機となって、世は携帯版の流行を迎えた。アルドは1514年に同じ大きさで『詩集』を再版している。もっとも、初版の標題は『俗事』で、次の版は『イル　ペトラルカ』と改まっている。で、厳密には再版と呼べないであろう。ところで、それではマキアヴェリが、はたしてどのアルド版を手にしたものか、確かなことは何もいえない。それにライバル印刷社に、フレンツェのジュンティ社がある。アルドがアリストテレス全集や、古典古代の書物を幅広く扱っていたのに対して、こちらはもっぱらイタリア文学の作品の出版に力を注いでいた。新しいイタリック体の印刷は当方が最初だと宣伝さえしていた。このジュンティが、やはり『俗事』の標題で1504年と'10に刊行している。したがってフィレンツェの人マキアヴェリが持参したのは、ジュンティ版の可能性が大である。もっともアルド版の成功がたちまちリヨンの海賊版を呼んだことは有名な挿話で、べつの印刷所の本かもしれない。

さて、ここに紹介するアルド版の、通称『イル　ペトラルキーノ』（小型ペトラルカ本）は、同社の14年版に続く改版である。一般にいう「ペトラルキーノ」は、広く八ツ折り版をも含めて小型『詩集』を指しているようであるが、この本の体裁ほど、その名前に応わしいものはない。アルドには、これも有名なギリシア語の豆本（1497年）があるが、その２倍ほどの、184ページ、16×9cmの本である。そこで、一見変哲もないこの本を手に取ってよく眺めると、モロッコ革の表紙に金縁の紙葉で、さすがにアルドの版と思わせる気品がある。当時の価格がどれほどであったのか、あいにく手元に資料がない。だが、初期の八ツ折り版が、必ずしもエコノミー版でなく、またグリッフィの彫りのイタリック字体が、ただスペースの節約にあったわけでないことは、最近読んだM.Lowry の『マヌティウス・アルドゥスの世界』（Oxford 1978）で知りえたことである。とかく現代感覚は、古書に接するときに錯覚をおかしてしまう。

ところで、この小型本がどれほど当時のダンディズムにもてはやされたかは、奇書として名高いアレティーノの『ラジオナメンティ』を読むと、よく分かる。宮廷娼婦のナンナが、門前市をなすかに近づいてくる騎士たちの様子を描写して、こう記している。「供の者を従えて馬上にまたがり、つまさきを鎧に軽くかけて、手には《ペトラルキーノ》などもつ。優雅に詩歌を口ずさみ、颯爽と進む」。もっともこれが、初期の版か、この版かとなると、どちらとも決めかねる。ただし、明らかにこの本の印象を語ったと考えられる、同時代人の証言がある。それは、メディチ家のコジモ３世に仕えた学者アントニオ・マリアベーキのことばである。彼の蔵書はゆうに３万冊を越すとされ、遺言によってフイ

レツェ共和国に寄贈されて、現在のフイレンツェ国立図書館の基礎を形作っている。そのマリアベーキの手紙に、「《ペトラルキーノ》ほど、美しい本はない。薄手の上質紙で、ページに触れると、通常の紙質がどれほど厚いかを思い知らされる。なめし皮は、百年ももつほど堅牢である。思うに、製本は外国綴じであろうか」と。

確かにしっかりした薄茶の皮表紙（2.5cm）を開くと、その裏の縁取りが金の模様入りである。あたかもウェジウッドのコーヒカップをもち上げると、ソーサーの底に美しい彩色がふと目に留まるといった、小気味よさである。本文は、『ペトラルカ詩集』と『トリオンフィ』から成っていて、そこまでで184ページである。序文に「読者に」のことばがあり、本文の末尾には、参考資料の意味あいでか、本来返し歌であった数編のソネットのよりよき理解のために、相手の詩人の送った作詩が記載されている。また、《カンツォーネ70》の中で初句のみ引用されたカヴァルカンティ、ダンテ、チーノらの本歌が、編者アルド家のことばと共に、紹介されている。末尾には、全歌の「初句索引」が収められている。奥付には、「アルド・ロマーノと義父のアンドレア・アゾラーノ家で印刷、ヴェネツィア　1521年６月」と書誌情報が載る。事業の創始者の人文学者マヌツィオは、1515年に死んでいるから、一時期、アゾロの出身アンドレア・トレザーニが経営していたころの、出版物である。なお、ヴェネツィアでは、共和国暦により２月末日までは前年度扱いとなるから、年初の奥付のものは要注意である。もっとも、この書物はその例には当たらない。

さて、巻頭に「読書へ」の献辞があり、末尾にもことばがあるのだが、筆者の名が記されていない。おそらく刊行者の手になるものであろう。序には、「詩集が今日望みうる最高に美しく、楽しい、有意義な本であること」、「世の恋人たちがたえずこの本を携えて、限りない楽しみを味わい、最高の詩人の雅やかな純愛を通して、人を気高く愛することを学び、どのようにして愛の焔や溜息、希望、歓びを作詩したらよいかを学ぶように」とある。

『詩集』全体を、「マドンナ・ラウラの生に寄せて」、及び「マドンナ・ラウラの死に寄せて」、の２部編成の形に作り変えたのは、アルド（1501）版が最初で、刊行者のマヌツィオが著名な文学者ピエトロ・ベンボの意向を汲んで、そうしたものであろう。この版の底本はおそらく手稿 Vat.

オルテリウス「地球の舞台」から

Lat. 3197であろうが、この手稿はもとより、一部自筆の決定稿 Vat. Lat. 3195には、そうした副題はない。したがって、この本でもその区分が踏襲されている。

この時代、盛期ルネッサンスでは、『詩集』の読み方は、どちらかというと文字上の意味を汲み取って、中世文学に伝統的な寓喩の意義をやや軽んじる傾向がある。このように、全体を恋愛詩集と概括してしまうのも、その端的な表れであった。前述の序文も、時代思潮をよく反映している。やや後に、愛のテーマとさほど関係のない作品のみ蒐めて、第3部（「雑主題」）を設ける形が生まれたが、それはヴェルテッロの注釈本（1525）以後である。

この本のもう一つの特色は、なに一つ脚注のないことである。このヴェルテッロと共に、ルネッサンスを代表する注釈者は、ジェズアルド（1533）であるが、まだ二人の書物は出ていない。だが、「揺藍期本」の中でもヴァンデリーノ・ダ・スピーラのように簡単な注釈があるのが普通であったから、アルド版は思い切って、本文に絞ったと思える。そのため、この小さな本の中に、『詩集』と『トリオンフィ』が収められている。現代の普及版でさえ、前者だけでゆうに400ページを越えるから、なかなかのものである。そこで念のために、「雑主題」に入れることができる反教皇庁のソネット数編を調べてみると、それも漏れてはいない。これらの作品は、書誌的にも興味をそそる。というのは、「禁書目録」（『トレント公会議録』パオロ・ヌツィオ刊行、ローマ1564、及びジュンティ刊行、フィレンツェ同年、の両書末尾に目録を収む）との関連で、このソネット3編が処分の対象となっている。じじつ、16世紀から18世紀初めまでの諸版では、これらは除外されている。またそれ以前の版でも、所有者によって、斜線が引かれていたりする。

16世紀の活版印刷は、いうまでもなくヴェネツィアが中心である。この世紀に出版社は493に上り、7,000点にも及ぶ点数が出たという。中でも初期にはアルドが、中・後期ではジョリトの活躍が目覚ましい。そのジョリト（1536-1606）の出版物の総点数は1,019で、それに基づく調査によると、出版の最盛期は1545年から'70年、そのピークはおよそ'50年である。その間、文学のジャンルが約400点、中で「詩集」が112点を数える。そのうち『ペトラルカ詩集』は22点を占める。他の出版社と合わせて、この100年で『詩集』は167版である。もっとも、当時の抒情詩は、多かれ少なかれペトラルカ詩風の影響下にあったから、他の作者の『詩集』も含めればかなりの数に上る。そこで、出版界を支えたのが文学書の流行にあり、その流行がもっぱら抒情詩に集まり、抒情詩とは結局『ペトラルカ詩集』を指したとすれば、このアルド版の『小型ペトラルカ本』は、そうした当時の出版ブームの火付けやくを果したといっても、それほど誇張ではなかろう。前の世紀にようやく八ツ折り版が出現して、聖職者や信者のために、聖書や典礼書が持ち運べるようになってから、ほんの半世紀の間に、学問の中でもソフトな文学書が、しかもエレガントな詩の本が、こうして掌中に収まる体裁で読めるようになったのである。細密画こそ挿入されていないものの、当時の知識人には垂涎の的の本であったろう。

しかも、詩の本として、手軽で注のないことが、むしろ爽やかな印象を与える。むろん当時の知識人にしても、なんらの注なしにアレゴリーが分かるはずがない。それほど難解な内容をこの書物は秘めている。しかも、中世の詩を読むコツは、ときに文字上の、ときに寓喩上の意味を汲みつつ、作品を味わうことにある。で、ある程度の予備知識が必要としても、その先は、読者の空想が自由に広がるゆとりのある紙面がよい。その意味で、この本は最良の体裁の詩の本である。これに似たものを、近代の数多くの『ペトラルカ詩集』のポケット版から探すとすれば、近年のエイナウディ版（ポンキローリ注記、1964）やガリマール版の、グラモンの仏訳（1983）であろうか。だが、前者は470ページを越す分厚さで、後者は薄く粗雑な紙質で、とうてい16世紀の気品ある書物と肩を並べることはできない。

なお、ついでながら原作の標題についてひとこと書き加えておこう。原題は、ラテン語で『俗事断片（詩集）』Rerum vulgarium fragmentaで、イタリア以外の国々では、『カンツォニエーレ』Canzoniere の名で親しまれている。後者は、

元来「詩歌を作る人」の意で、転じて「作詩家の書」、つまり「詩集」となった。しかも抒情詩ではペトラルカの名声が高く、ペトラルキズムの影響が西欧諸国に大きかっただけに、この語が『ペトラルカ詩集』を意味する固有名詞に転じた。それが通称の由来である。だが、イタリア書誌の上では、昔も今も題名は一定ではない。それは、「カンツォニエーレ」の語が、古くから複数の詩人の「詩華集」の語感をもつからである。そこで、一人の詩人の《詩集》には、《リーメ》の語が妥当ではないかとの意見が出た。ここで、これまでの標題をふり返って見ると、「揺藍期本」では、原題の『レールム・ウルガーリウム・フラグメンタ』(ラテン語)や、『ソネットとカンツォーネ』がある。15世紀に増えたのは『イル　ペトラルカ』(ペトラルカの本)、もしくは『ペトラルカ』であり、アルド版のこの書物もその分類に入る。他に原題の一部を採用した『俗事』(イタリア語)や『俗語作品』があり、こうした標題の本では、作者の俗語作品のすべて、つまり『詩集』と『凱旋』の二作が収められるのが常である。『カンツォニエーレ』の標題を初めて用いたのは、ジュンティ版(1515)が最初であろう。ルネサンス期では同一出版社でも迷いがあり、アルド版は初版本が『俗事』(1501)で、次に『イル　ペトラルカ』('14)。ジュンタ版のヴェルテッロ注の本は『俗語作品』(1525)から、次ぎに『イル　ペトラルカ』('28)である。ニコリーニ版(ヴェネツィア)のダニエッロ注では、再び『ソネットとカンツォーネ集』に逆戻りしている。ところで、近代の諸版で好まれる『リーメ』Rime(個人の詩集)の語は、ヴェネツィアの版('46)に初めて現れ、ザッタ版(ヴェネツィア)のカステルヴェトロ注(1582)の書名となり、その後ムラトーリ注(1711)、カルドウッチ注(1899)、ズィンガレッリ注(1926)に採用されて、現在まで幅広く用いられている。19世紀の出版物では、『リーメ』の版は161点で、『カンツォニエーレ』が15点を数え、『イル　ペトラルキーノ』はわずかに1点に過ぎない。したがって、すでにルネサンス期に流行した前述の2つは消え、現代では—テキスト校訂版のような厳密なもので、ラテン語標題をそのまま用いたものを別にして—普及版では、後の2つが主流である。なお、今日も古典的な注釈書として声望の高いキオルホリ注(1924)では、『リーメ　スパルセ』(書き散らした詩歌)を付しているが、これは原題の〈フラグメンタ〉(断片)に対応する原作者の用いたイタリア語を、そのまま使ったものである。なお(断片)の意味は、《コルプス》(一編の作品)の形に整っていないの意味で、そ語法にはこの人文学者の謙虚な姿勢がたぶんに含まれている。

スウェーデン語専攻新入生のためばかりでなく……

外国語科目　清水　育男

新入生の皆さん、入学おめでとう。新しい外国語にチャレンジされる熱い意気込みが、今まからもう伝わってくるようです。特にスウェーデン語のようなマイノリティーの言語は、日本語による辞書も文法書もありません。従ってスウェーデン語専攻の学生は、それこそパイオニア精神をもって、スウェーデン語に取り組むことになりましょう。世間では余り耳にすることのない外国語ため、ひょっとしたら多少の優越感も感ずるかも知れません。マイノリティー言語専攻の運命として、困難もありますが様々な特権もあることを申し添えておきましょう。

さて、こうした世にも稀れな言語を大学で専攻しようと心に決めたスウェーデン語学科の学生諸君は、きっとスウェーデン語をマスターしてスウェーデンの言語、文学、分化、事情などを吸収することとを目的にされていることでしょう。事実、大阪外国語大学の英語名はOsaka University of Foreign Studiesとあり、外国の研究にあるからです。つまり、スウェーデン語修得の究極の目的は、スウェーデンについての研究であることは確認する必要もないでしょう。

ところが、わずか 800万人程度の話し手しかいないこのスウェーデン語を会得すると、面白いことに二つの日本像がよく見えてくるのです。一つは中立国、福祉先進国の現代スウェーデンから、日本の実状がどんなものであるかということが分ること。もう一つは、昔の日本、正確に言えば、350年前の日本と225年前の日本が浮び上ってくるのです。前者の日本の実状が見えてくるのは、他の外国語修得に関しても言えることなので説明は不要ですが、後者の過去の日本について、ここでもう少し述べてみたいと思います。

数百年前から日本と交流のあった西洋の国々と言えば、ポルトガルとオランダがまず挙げられるであろう。散発的ではあるが、これらの国々にひけをとらず、早くから日本と接触のあったもう一つの国にスウェーデンがある。

江戸時代初期、慶安４年（1651年）に１人のスウェーデン人が長崎に上陸し、日本に一年三ヵ月滞在し、スウェーデンに帰国後、スウェーデン語でアジア旅行記を誌したことなど知る人は数少いであろう。スウェーデン本国でさえ、専門家以外で知っている人はごくまれと言ってもよい。彼の名は、ウーロフ・エーリックソン・ヴィルマン(Olof Eriksson Willman ？～1673)、オランダの東インド会社の使節団に随行して日本にやってきたのである。彼は滞在中に、その使節団と共に東海道を上り、江戸に参府し四代将軍家綱に謁見している。こうした東海道旅行中の宿場町や自分の経験・見聞などをまとめ彼の母国語スウェーデン語で旅行記を残しているのである。その題名は『東インド、シナ及び日本への旅行』と『日本王国、その皇帝及び政治についての略誌』で前者の一部と後者が幸いにも原典から直接邦訳され、次の題で出版されている。

ウーロフ・エーリックソン・ヴィルマン
『日本滞在記』　尾崎義　訳
岩生成一　校訂
（新異国叢書６）　昭和45年　雄松堂

（残念ながら、原本は1667年に一度刊行されただけで、現在入手は極めて困難である。そのためか、前にも述べたようにスウェーデン人にさえ彼の名は知れわたっていないのが実状である。）

彼が来航した年の日本は、三代将軍家光が亡くなり、由比正雪の乱が起きていた。彼の旅行記には、その家光についての記述は勿論、島原の乱（1637年）から14年後のキリシタン弾圧の模様など、日本史の教科書などでは得られない生々しい情況が外国人の目を通して、つまり日本人とは違った視点で語られている。また彼の描写している東海道の数々の宿場町は、時空を超えてその当時の光景を髣髴させる。東海道沿いの宿場町を古里に持つ読者には、350年も前の自分の生れ故郷の風景が、眼前に浮び上ってくると不思議な感銘を覚えるに違いない。因みに大阪近辺では枚方の知名が Firacatta で記載されている。現代のスウェーデンについて知るために、修得してきたマイノリティーの言語、スウェーデン語の知識が、はからずも 350年余りも前の自分小さな故郷（たとえば筆者の古里、小田原など）を活写していたことを知った時の感慨は、口では言い表せない。パイオニア的なスウェーデン語学習の苦しさは、ため息と不思議な感動と喜びに変換されていることに気づく。スウェーデン語学習の大きな余録である。

更にこれより 124年時代が下った安永４年（1775年）に、もう一人のスウェーデン人が来日する。植物学者カール・フォン・リンネ（Carl von Linné 1707～1778）の高弟カール・ペーテル・チューンバリ（Carl Peter Thunberg 1743～1828）である。彼も同じように旅行記を残しており、その邦訳もある。残念ながら、フランス語からの重訳であるが、内容はヴィルマンの旅行記に劣らず興味深い。

『ツンベルグ日本紀行』　山田珠樹　訳注
昭和３年　雄松堂

（スウェーデン語の発音はツンベルグよりチューンバリの方が近い）

こうした素晴しい日本旅行記を残してくれた二人のスウェーデン人に感謝しつつ、もう一度、日本とスウェーデンとの長い輝かしい交渉の歴史に思いをめぐらしてみようではありませんか。

両翻訳書とも外大の図書館に備わっており、スウェーデン語専攻の学生に限らず、他学科の学生にも是非一読をお薦めしたい。

「本を通じた新たな〝出会い〟を求めて」

外国語科目　秋田　茂

新入生の皆さん、御入学おめでとう！

これから四年間の大学生活を送ってゆく中で、〝良き師、良き友、良き本〟との出会いが諸君の毎日を実り豊かなものにしてゆくでしょう。その中でも〝良き本〟との出会いの場を提供するのが図書館です。ここでは、私の個人的な本を通じた〝交友録〟を紹介し、皆さんに読書の素晴らしさを再認識してもらえれば幸いです。

私にとって忘れ得ぬ一冊は、大学二年の時に読んだ岩波新書－吉岡昭彦著『**インドとイギリス**』(1975年)です。文学部の史学科で西洋史を専攻していた私は、漠然と近・現代史に興味を持っていたものの、既存の伝統的な西洋史学、つまり我々日本人にとって憧れの的、模範としての歴史解釈に満足できず、もっとグローバルな、相互関係史として近現代世界を考えてみたい、という今では半ば常識化した発想を抱いていました。そんな時、東北大学の吉岡氏の集中講義を受けるチャンスを得て読んだのだが、『インドとイギリス』です。

同書は、インド旅行記の形をとりつつ、イギリス経済史家の目でインドの現状を考察し、「それを手掛りとして、イギリス帝国主義とインド統治という観点から、両者の相互規定的な関係を、主として経済的側面から歴史的に考察しよう」(同227頁) としています。農業、工業、金融それぞれのレベルでの英印関係が詳述され、〝イギリスの王冠の輝ける宝石〟としてのインド支配が持っていた意味が明確に提示されています。同時に、インド植民地支配の現代イギリスに対する反作用＝「帝国主義の報復」についても言及されています。初めて本書を読んだ印象は鮮烈であり、第三世界・植民地の側からイギリス近現代史を見直す意欲的な試みに大いに魅かれたものです。卒論のテーマを捜していた私にとって、「よし、これでやってみよう！」というヤル気を起こさせる作品でした。集中講義を通じて、著者に直接質問する機会が与えられ、行間に滲み出る著者の個性を確認できたのも好運でした。それ以来私は、英印関係史を研究テーマに選んで現在に至っています。

ところがいざ勉強を始めてみると、吉岡氏の本も万全ではないことがわかってきました。確かに英印関係は19世紀世界の重要な基軸ですが、イギリス帝国は、オーストラリア、カナダ、南アフリカや香港にも広がり、その帝国体制もまた、グローバルに展開する世界資本主義の一部にすぎないからです。ちょうどその頃、アメリカの社会学者Ｉ・ウォーラーステインの提唱する「世界システム」論の成果が紹介された（川北稔訳、『**近代世界システム**』Ｉ・II、岩波現代選書、1981年)。彼の研究は、16世紀大航海時代から20世紀現代に至る歴史的発展を、「世界経済」の発展・膨張を中心とした世界の一体化の過程と捉え、諸地域の相互依存関係を、「中核(コア)」「半辺境(セミ・ペリヘリィ)」「辺境(ペリヘリィ)」の三層構造で理解しようとする、文字通りグローバルな、巨視的歴史解釈です。こうして私の興味関心は、さらに大きく広がることになりましたが、こうした〝大風呂敷〟を広げた研究は、とても一人だけでカバーできるものではありません。

次の転機は外大への就職と共に訪れました。５年前の外大赴任直後に、英語学科の松田・岡田両先生が主催する読書会に加えてもらったのです。この会は現在でも、教官を主要メンバーとして「外大読書会」の名で１ヶ月に１回のペースで開催されていますが、当初の意図は、学科の壁を越えた教官同志の交流と、意欲的な学生諸君への刺激剤として、共通のテキストを読んで自由に議論しつつ親睦を深める機会をつくることだったと聞いています。読書会でのくだけた議論を通じて、新たな発想、思考法を得ることができる。また、会で積極的に学んだ学生諸君の中には、一橋大学・筑波大学・大阪大学・神戸大学等の大学院へ進学し、歴史学・経済学・国際関係論をより深く勉強するような人たちも出てきました。今までに読書会で取り上げた本は、ウォーラーステインの他に、猪口孝『**国際**

政治経済の構図』、宇沢弘文『近代経済学の転換』、加藤祐三『黒船前後の世界』、リーン・ハント『フランス革命の政治文化』、バリントン・ムーア『独裁と民主主義政治の社会的起源』等々、実に多彩です。現在は、教官の主要メンバーによる共同研究プロジェクトを推進しています。こうした共同研究が可能になったのも、普段からの読書を通じた交流の賜物であって、私個人にとっても、自分の研究の視野・射程を広げる上で大きなプラス要因になっています。

以上は、私個人の本を通じた〝交友録〟の一端ですが、要するに、常に情報をキャッチするアンテナを張っておくことが大切です。いつ素敵な本との〝出会い〟が訪れるかわかりませんから。まず手始めに、一般教育科目や語学科の入門講義等で紹介された本を図書館で捜して、手に取ってみて下さい（試験やレポート作成に役立つことは言うまでもありません）。また、生協編集の書評誌『Rainbow Review（特集）・新入生に薦める十冊の本』を参照するのもいいでしょう。そこから、皆さんの知的冒険が始まるわけで、それによって、今までの受動的な受験勉強からは得られない、学ぶことのおもしろさを知ることができるでしょう。そして、本を通じた新たな〝交友録〟の作成が始まるのです。

1989年度　―よく読まれた本―（貸出図書ベスト30）

913．6／R　うたかた／サンクチュアリ／吉本ばなな著
913．6／R　ノルウェイの森；上／村上春樹著
913．6／R　ノルウェイの森；下／村上春樹著
913．6／R　つぐみ／吉本ばなな著
884．　／55　例文で覚えるロシア重要単語2200／佐藤純一　木島道夫編
290．8／R　地球の歩き方；1　ヨーロッパ．－'88 ～89版
236．／203　スペイン：歴史的省察／J．ビセンス・ビーベス著
290．8／R　地球の歩き方；・25（'88 －'89 版）
387．　／R　外人をどうしたらよいかどうか事典／パキラハウス著
909．3／4　だれが、いばら姫を起こしたのか：グリム童話をひっかきまわす／イーリング・フェッチャー著
167．／475　イスラム：思想と歴史／中村廣治郎著
224．／183　インドネシア民族意識の形成／永積昭著
236．／214　概説スペイン史／立石博高　若松隆編
253．／128　概説アメリカ史：ニューワールドの夢と現実／有賀貞　大下尚一編
801.5／382　統率・束縛理論の意義と展開／ノーム・チョムスキー著
801.5／387　現代の文法理論：GB理論，GPSG，LFG入門／ピーター・セルズ著
933．／537　ライ麦畑でつかまえて／J．D．サリンジャー著
933.7／360　インドへの道／E．M．フォースター著
233.06／25　イギリス近代史：宗教改革から現代まで／村岡健次　川北稔編著
236．／180　スペイン：歴史と文化／H．カメン著
236.05／8　スペイン帝国の興亡　1469－1716／J．H．エリオット著
255．／38　ラテン・アメリカの歴史／ラテン・アメリカ協会編
262．／33　ブラジル史／アンドウ・ゼンパチ著
290．8／R　地球の歩き方；26　イギリス．－ '88～89版
332.38／204　ソ連経済：構造と展開／ポール・R．グレゴリー　ロバート・Cスチュアート著
801．／1392　教養のための言語学コース／小泉保著
833．／31　英文法シリーズ；25．
360．2／22　スペイン語の歴史／サムエル・ヒリ＝ガヤ著
933.7／279　ぼくが電話をかけている場所／レイモンド・カーヴァー著
933.7／478　レス・ザン・ゼロ／ブレット・E・エリス著
963．／402　百年の孤独／G．ガルシア・マイケル著

＊＊＊　89年度　学生図書貸出統計表　＊＊＊

90年　3月31日　調

区分	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計		
月	総　記	哲　学	歴　史	社会科学	自然科学	工　学	産　業	美　術	語　学	文　学	冊　数	人　数	開架冊数
4	267	138	309	482	24	24	10	69	494	640	2,457	1,391	2,044
5	445	211	550	1,015	44	32	25	114	661	822	3,919	2,264	3,238
6	395	201	496	916	40	20	43	159	627	796	3,693	2,191	3,074
7	234	286	601	1,076	51	29	38	132	850	1,030	4,327	1,940	3,711
8	31	18	45	136	5	4	8	9	49	95	400	193	322
9	374	227	546	1,099	39	35	36	104	590	793	3,843	2,144	3,212
10	480	301	625	1,377	94	52	82	142	769	999	4,921	2,779	3,977
11	547	250	601	1,248	76	33	61	133	873	889	4,711	2,586	3,773
12	472	380	915	1,777	65	55	67	178	1,154	1,233	6,296	3,136	5,103
1	253	365	624	1,132	168	31	46	150	688	774	4,231	2,305	3,668
2	352	693	1,171	1,886	185	49	84	271	1,382	1,653	7,726	3,643	7,021
3	99	46	118	209	13	17	15	44	220	222	1,003	424	805
合計	3,949	3,116	6,601	12,353	804	381	515	1,505	8,357	9,946	47,527	24,996	39,948

＊＊＊　89年度　学年別図書館利用統計表　＊＊＊

90年　3月31日　調

月	1 年	2 年	3 年	4 年	大学院	II 部	卒業生	その他	計	5時以降
4	154	173	291	442	80	195	18	38	1,391	404
5	260	249	540	635	118	353	33	76	2,264	746
6	227	289	573	565	106	352	32	47	2,191	713
7	235	236	483	405	108	384	41	48	1,940	572
8	26	26	38	48	14	26	5	10	193	0
9	265	307	461	558	116	385	23	29	2,144	682
10	312	302	606	896	116	458	27	62	2,779	972
11	246	347	543	852	91	391	24	92	2,586	835
12	297	365	628	1,088	110	539	26	83	3,136	1,051
1	290	295	568	501	69	503	16	63	2,305	815
2	433	568	894	599	120	912	19	98	3,643	1,313
3	29	55	90	66	51	83	6	44	424	0
合 計	2,774	3,212	5,715	6,655	1,099	4,581	270	690	24,996	8,103

〝貴重図書解題〞　ORTELIUS, Abraham:
Theatrum oder Schawplatz des Erdbodems（1572年刊）について

人文地理学　神前　進一

『地球の舞台』と題されたこの地図帳は，フランドルの著名な地図作成者で，メルカトルに先立って最初の近代的地図帳を出版したことで知られるオルテリウス（Ortelius, Abraham）（1527～1589）による最初のドイツ語版の地図帳である。

オルテリウスの『地球の舞台』は，1570年のラテン語による初版以来，世界最初の近代的地図帳として好評を博し，彼の死後も含め，1612年までに各国語で41版が出版された。それらは，ラテン語21版，オランダ語2版，ドイツ語5版，フランス語6版，スペイン語4版，イタリア語2版，英語1版を数える。本書は，このうちの1572年の最初のドイツ語版にあたり，表題扉と69葉の各図ごとの解説頁がドイツ語，各図の内容はラテン語で書かれている。

初版の地図帳は，53葉70図からなり，世界全図１，各大陸図4，ヨーロッパ図56，アジア図６，アフリカ図3が含まれる。これらは当時の地図作成者の最新の成果をもとに，オルテリウスがフォリオ版（399×268mm）の統一した紙面と表現方法で描き直し，集大成したもので，彼が典拠とした87名の地図作成者の名前があげられている。

また，最新の地理的知識に対応するために，1573年には17図からなる増補版（Additamenta）が刊行され，以後も４にわたり増補され，最終的に108図の新図が追加された。本館所蔵のドイツ語版は，最初の増補版を含み，追加された図は，番号にＡを付して該当箇所に挿入され，綴じ込まれている。

この地図帳は，当時急速に進歩しつつあった銅版印刷によっており，彩色の有るものと，無いものがみられるが，本館蔵書は，すべての図に美しい手描彩色が施されており，400年をこえる歳月を感じさせない保存状態の良さも特筆に値する。

さらに，本館蔵書は，最初の所有者が明らかで，かつ各図の解説に英訳自筆稿が残されている点で，資料的価値も極めて高い。本書の最初の所有者は，イギリス人の商人で地図作成者でもあった William Smith（1550頃～1618）という人物である。彼がニュルンベルク滞在中に，本書の英訳版の出版を計画し，各図裏のドイツ語の解説頁と見開きの余白頁に，解説文の英訳をペンで書き記している。この計画は，日の目を見ずに終り，唯一の英語版は，1606年にラテン語版から翻訳出版された。

今日，私たちは地図帳を atlas と呼ぶが，ギリシア神話の巨人に由来するこの名称は，オルテリウスの親友でライバルでもあった当代きっての地図学者メルカトルが，地図帳の表題と扉絵に用いたのが最初で，その出版は1595年であった。したがって，この地図帳はアトラスとは呼ばれず，題扉（写真）にはドイツ語の表題 Theatrum oder Schawplatz des Erdbodems が中央に記されている。その四周には４人の女性が描かれ，上がヨーロッパ，右がアフリカ，左がアジア，下がアメリカの各大陸を象徴するとされる。この地図帳に集録された地図は70枚にも及ぶため，すべてを紹介することはできないが，広域や日本付近を表現した図を選び，若干の解説を試みることにしよう。

Typus Orbis Terrarum と題された世界図（表紙写真）は，地球全体を楕円形で表現し，メルカトルが1569年に作成した世界図を簡略化した内容である。15世紀のイタリアでは，地球球体説に基づく紀元２世紀のプトレマイオスの世界図が復活し，その地図が大航海時代に大きな影響を与えたことはよく知られている。その約１世紀後に地図作成の中心地となったフランドルでは，大航海時代の成果を取り入れた近代的地図の端緒がメルカトルとアルテリウスという２人の巨匠によって開かれ，以後この世界図の形や内容が標準となって多数の地図が出版され，人々の世界観に大きな影響を与えることに

なった。

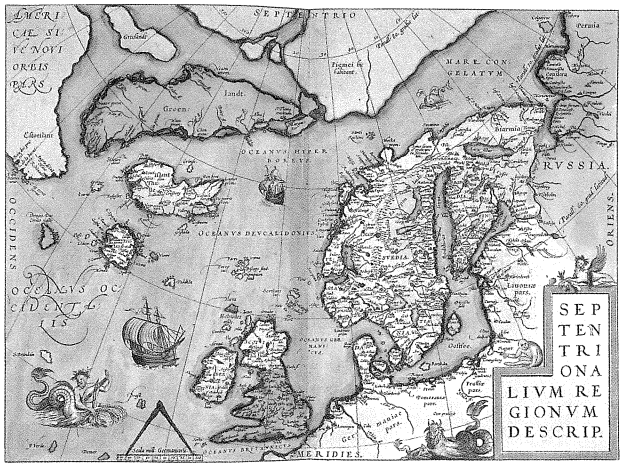
新大陸をはじめ，大航海時代の最新の地理的情報を取り込んではいるが，ヨーロッパから遠く離れたところでは，不正確な情報や想像に基づく部分もみられる。例えば，南半球にはオーストラリアではなく，未知の南方大陸（Terra Australis Nondum Cognita）と記された，一続きの空白の広大な陸地が描かれているのが目を引く。この大陸は，ギリシア人がその存在を信じ，プトレマイオスの世界図に描かれて以来，さまざまな謎と伝説をともなって人々の心の中に生き続けてきた。オルテリウスは，「誰一人，確かなことは言えない」との注記によって断定を避けているが，この大陸の存在が最終的に否定されるのは，18世紀末のクックの太平洋探検を待つことになる。

新大陸では，南米南西岸のチリ付近の突出，北米西岸の西方への著しい拡大など，太平洋側での不正確さが目立つ反面，北米のセントローレンス川，南米のラプラタ川が広い川幅で強調して詳細に描かれ，当時のヨーロッパ人による生活圏の拡大の過程を読み取ることができる。

マルコポーロの『当方見聞録』によって紹介された日本（Iapan）は，ヨーロッパ中心のこの世界図の東端に位置するが，その輪郭は空想の域を出ていない。

東北アジアを中心としたタルタリア(韃靼)図(P.12写真)で，タルタリアとアメリカ（Americae vel Novi Orbis Pars＝アメリカまたは地球の新しい部分）のカリフォルニア半島の間に抱かれるように描かれた緑色の島が日本である。日本は，緯度は正しく北緯30度と40度の間に記されるが，経度はロンドンでなく大西洋のベルデ岬諸島（西経25度）から東回りに190～215度と，大幅に東に偏した位置に描かれている。日本の形は世界図での形とは全く別で，ポルトガル人宣教師によって伝えられた行基型日本図の影響が認められる。Bandumia（坂東）と記された東日本の欠落した本州と，Tonsa（土佐）と表示された四国が識別できるが，九州はBungo（豊後）とCogaxuma（鹿児島）が別の島に分れた形である。Meaco（京），Osaqua（大坂），Amanguco（山口）など西日本の地名がみられ，ヨーロッパ人との接触の大きかった地域が詳しく描かれている。また，日本の南の海上には，「日本島，ベネチア人マルコポーロがかつてジパングと書いたもので，黄金の国とも呼ばれ，かつてカーン大王が戦争によって得ようとしたが失敗に終った。」との注記がある。

北欧から北大西洋を描いた地図（写真下）も，1569年のメルカトルの地図に基づいているが，当時の北極観を読み取ることができる。北極点には磁石を引きつける磁石島があり，その周囲は4つの大きな島で囲まれていると考えられていた。この図の北端に位置するピンク色の2つの島がそれで，右手の島には小人が住むと記されている。これらの島の間の海峡は，海水が激しい潮流となって北極点の奈落に向って流れ込んでいるとされ，航海の難所として恐れられた。図の北西隅のピンク色の部分は，アメリカであり，南端に伝説上のEstotilandが位置付けられている。北大西洋の北部に東西に大きく横たわる緑色の島がグリーンランドで，メルカトルが初めて北方大陸から分離した島として表現した。その南の黄色い島がアイスランドで，かつてThuleと呼ばれたと記されている。ローマ時代に北方のさいはての地と考えられていたトゥーレをアイスランドに比定している。グリーンランドやアイスランドは，中世にノルマン人の植民地が作られ，交易が行なわれた地であったが，情報は不確かで混沌としていた。アイスランドの南西方には全く実在しないFrisland，Icaria，Drogeoの3つの島が描かれ，とくにフリースランドには多くの町が書込まれている。これは1558年にベネチアで出版されたゼノの北方図を根拠



にしたための誤りであるが，1957年に「発見」され，その後20年余りも学界を大論争に巻き込んだヴィンランド図のことを想起させる。謎に満ちたおどろおどろしい北の海のイメージは，楽器を奏でる海人の図像とも重なる。

ここまで、この地図帳にみられる前近代的要素の残滓を取り上げてきたが、近代的要素を強調することがより正当な評価であろう。科学的地図投影法の使用、種々の最新情報を批判的に摂取した結果としての地点の位置や海岸線の正確さ、統一された地図表現方法など、地図作成史上で近代地図の始まりを画する記念碑的作品であることは多言を要しない。ここで紹介できなかったヨーロッパ各地の地図(P.3のイタリア図参照)では、教会を思わせる建物の記号によっておびただしい数の都市が記載され、河川は支流も含めて詳細に表現されている。現在の地図と異なる点は、山地の起伏表現で等高線やケバでなく山型を連ねて描いていることや、クロノメータの発明される18世紀以前の地図に共通する経度方向の距離の過大表現などである。

いずれにせよ，この地図帳は，大航海時代の人々の生活圏や地理的知識の広がりを伝えてくれる貴重な生き証人である。各図に記載された地名を丹念に読み取っていくことで，16世紀後半の地域像・世界像が生き生きと浮び上がってくるであろうし，また，地図の周囲に施されたカルトゥーシュと呼ばれる装飾の図柄や，海の部分に描き込まれた奇怪な生物などの意味を，図像学的に読み込んでいくことも面白いであろう。

この地図帳の多方面からの活用を願ってやまない。なお，ラテン語の解釈について，西洋史学の南川助教授から御教示を頂いたことに深謝する。

LIBRARY INFORMATION

— 第 7 号 —　　1990年4月27日

編集発行　大阪外国語大学附属図書館

印　　刷　㈱ユニワールド印刷センター